



Title	ヘスとマルクスにおける人間観と労働観
Author(s)	畑, 孝一
Citation	一橋論叢, 50(1): 130-137
Issue Date	1963-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/3210">http://doi.org/10.15057/3210</a>
Right	

《研究ノート》

ヘスとマルクスにおける

人間観と労働観

畑 孝 一

モーゼス・ヘス(一八一二—一八五)は、ドイツの初期社会主義、いわゆる「真正社会主義」の代表者であるが、その理論については、A・コルニユによって、「彼(ヘス——引用者)はマルクスとエンゲルス以前に、ドイツ古典哲学とフォイエルバッハの哲学との発展しうる萌芽を社会主義理論にとって実り多いものにしようと試みた。彼の試みは失敗した……。とはいえ、科学的社会主義の完成の第一段階にとって確かに重要な問題提起は、彼から生じた」といわれ、またその方法については、G・ルカーチによって、「彼(ヘス——引用者)は……あらゆる弁証法的思想家のうちで時としてはマルクスのな弁証法把握にもっとも近づいた」けれども、「ヘーゲルからマルクスへの弁証法の発展」の中では、「ヘス自身は……全く失敗したマルクスの先行者」であった、といわれている。

このように、ヘスとマルクスの社会主義の理論と方法には、

密接な関連、同一性とともに、また決定的な差異があると考えられるのであるが、それはマルクスのヘスに対する態度にも示されている。すなわち、マルクスは一八四四年の『経済学・哲学手稿』ではヘスを「国民経済学の批判者」として高く評価するにもかかわらず、一八四八年の『共産党宣言』においては、「翻訳」によってドイツ「哲学の立場からフランスの思想をとり入れた」超階級的思想家として真向から批判するのである。マルクスのこのような態度の変化は、勿論彼自身の思想の発展とも無関係ではないが、それとともに、基本的にはそれはヘスの思想の二面性によるものと思われる。この二面性を明らかにすることが、ヘス研究におけるわれわれの課題であるが、それは、一方で思想構造においてもマルクスに近いヘスが、

どの点でマルクスと決定的に異なっているかを明らかにするとともに、それによって、他方でマルクスの思想構造を具体的にとらえることに役立つであろう。

というのは、こういうわけである。ヘスとマルクスとの思想構造における関連は、両者の思想がともに同一の源泉から、すなわち、ドイツ古典哲学、フランス社会主義、イギリス古典派経済学から構成されているところにあるのだが、それら三つの思想源泉からの両者の継承における相異が両者の思想構造の相異をもたらしているのである。すなわち、両者は、ともに、ドイツ哲学から作り出した方法をフランス社会主義の私有財産批判と結びつけることによって獲得した「労働の疎外」の視点から、イギリス経済学を批判的に摂取するのであるが、両者の方

法がともにドイツ哲学から作り出されたものとして一面で同一性をもつにもかかわらず、他面で決定的な相異をもっているため、それが両者の「労働の疎外」の概念とイギリス経済学からの批判的摂取における相異を生ぜしめるとともに、さらにそれによって、両者の思想に決定的な相異を生み出しているのである。

だから、ヘスとマルクスの社会主義における決定的な相異の基礎はその方法にあるといえるのであるが、それはまた、両者の人間観と労働観における相異に基礎をもつと考えられる。そこで、この小論においては、とくにヘスとマルクスの人間観と労働観について若干の考察を加えてみたい。なお、ここでは、両者がともに、方法の基礎を作り出すとともにイギリス経済学との対決を開始した一八四四年における著作を中心として、問題を扱うこととする。

- (1) cf. I. Goitein: Probleme der Gesellschaft und des Staates by Moses Heß. Lpz., 1934. S. 55.
- (2) A. Cornu: Einleitung zu Moses Heß—Philosophische und Sozialistische Schriften, 1837—1850. Eine Auswahl. hrsg. von A. Cornu u. W. Mönke. Berl., 1961. S. LXVIII.
- (3) G. Lukács: Moses Heß und die Probleme in der idealistischen Dialektik. Sonderabdruck aus dem von C. Grünberg hrsg. "Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung". XII. Lpz.,

1929. S. 5.

- (4) Marx—Engels—Kleine ökonomische Schriften. Berl., 1955. S. 43. 三浦訳『経済学—哲学手稿』(青木文庫版) 一一七頁。

- (5) Marx—Engels—Werke. Bd. 4. Berl., 1959. S. 485—499—500頁。cf. Lukács: *ibid.*, S. 1. Goitein: *ibid.*, S. 55, Anm. 44.

- (6) ヘスとマルクスの社会主義における相異は、勿論両者の階級的立場の相異とも無関係ではない。しかしこの点については、ここでは触れることができない。なお、ルカーチは、両者の方法の相異の基礎を階級的立場の相異に求めている。cf. Lukács: *ibid.*, S. 19 u. 45.

II

ヘスとマルクスは、ともに人間を「類的存在」ととらえる。そして、彼らにおいて人間が「類的存在」であるところでは、むしろあたり、人間が「人間相互の生産共同体」において「他人とともに共同生活をいとなむ社会的存在」である、ということの意味(1)しているのである。この「類的存在」としての人間という思想は、フォイエルバッハから引き継がれたものであるが、フォイエルバッハでは感性、愛が共同生活の中核をなしているのに対して、彼らにあっては、労働、生産が共同生活の中核をなしていた。

マルクスは、『経済学・哲学手稿』で、はっきり「人間は類的存在である」といい、人間の「類的生活」を、「生活を産出する生活」としての「生産的生活」として、また労働を「生産的生活や生活活動そのもの」としてとらえている。さらに『経済学ノート』(Aus dem Exzerptaten)の「ミル評註」では、彼は、「生産そのものの内部での人間の活動のおたがいの間での交換も、人間の生産物のおたがいの間での交換も、ひとしく類的活動であり、類的享受である。そしてその現実の、意識的な真の定在は社会的活動であり、社会的享受である。人間は真に共同的存在(Gemeinwesen)である……。」と述べ、生産活動あるいは生産物の交換を「類的活動」、「類的行為」ととらえ、それを「共同存在(Gemeinwesen)」、「社会的交通(Verkehr)」と規定している。そして、このような生産における共同生活の意味を、「人間としての生産」における「自己自身と他人との二重の肯定」ととらえ、次のようにいっている。人間は「生産において」自己の「個性と独自性とを対象化する」のであるから、生産活動は人間の「個人的な生命発現」なのであるが、それとともに他方で、その生産物は他人によって享受されたり使用されたりするのであるから、人間は「労働することによって人間的な欲求を充足するとともに、人間的な本質を対象化し、かくして他人の人間的な存在の欲求にそれにふさわしい対象物を供給した」ことになる。だから、人間は生産において「他人と類との仲介者」として、他人の「補完者」、「不可欠の一部分」である。かくして、人間は、自己の「個人的な生命発

現において直接に」他人の「生命発現をつくりだし、したがって」自己の「個人的な活動の中で直接に」自己の「真の本質、自己の「人間的な本質を、つまり、人間が共同的存在であることを確認し、実現」するのである。

このようなマルクスの把握に対して、ヘスは「貨幣について」(Über das Geldwesen)で、あらゆる生物を共同的存在つまり類的存在ととらえ、それに基づいて、生活活動の交換を人間の「類的行為」と規定する。彼によれば、「生きているもの(das lebendige Wesen)は……生きるために……より大きな個同一の有機体の多様な個々の分枝」として、「相互に、またそれらの共有の生活要素……と離れ難く結びついていなければならぬ」。従って、「生活とは生産的生活活動の交換」であって、「生産的生活活動交換の媒介物は、生物にとって譲渡しえない生活手段なのである。だから、……人間にとっては、彼らの社会的生活を相互に交換する領域——とくに社会における交通——が、譲渡しえない社会的な生活要素である。」それ故、「彼らの現実的生活は、彼らの生産的生活活動の相互の交換において、すなわち協働(Zusammenwirken)において、つまり社会全体との関連においてのみ成り立つのである。」従って、彼らは、同一の共同体(Gemeinschaft)の成員との……交通において彼らの生活活動を相互に交換しない限り、彼らの諸力を実現し、利用し、現実化し、活動させることができない。」だから、「個別的生活活動の相互の交換、すなわち交通、……協働が諸個人の現実的本質」であり、それが「類的行為」なのである。

以上のように、ヘスが生産における交換に共同性をとらえているのに対して、マルクスは、生産における交換を前提しながらも、むしろ生産そのものに共同性をとらえているのだが、いずれにしても、彼らは、ともに、生産を中核とする共同生活をいとなむ社会的存在という意味で、人間を「類的存在」ととらえているのであって、この点で彼らは同一の人間観をもっているということが出来る。ところが、自然的存在としての人間あるいは人間の自然的側面についての彼らの把握には、決定的ともいふべき相異が存するのである。

マルクスは、人間をなによりもまず「自然的存在」として、従って「肉体的・感性的で対象的な存在」としてとらえ、それが人間の本質に属することをはっきりつかんでいる。彼は『手稿』で、次のようにいっている。「人間は直接的には自然的存在である。彼は自然的存在として、しかも生活する自然的存在として、一面では自然的諸力の装備を、生活の諸力の装備を身につけている。彼は活動する、自然的存在なのである。これら諸力は彼のうちに素質や能力として、衝動として現存している。また他面では彼は、自然的・肉体的・感性的・対象的存在として……被圧迫的な、制約された存在である。いかえれば、彼の衝動の諸対象は、彼から独立した諸対象として、彼の外部に現存している。それにもかかわらず、これら諸対象は彼の欲求の諸対象であって、彼の本質の諸力が活動しかつ自己を確認するために欠くことのできない本質的な諸対象なのである。」<sup>11)</sup>

このように、マルクスは自然的存在としての人間をも人間の

本質としてとらえているのであって、そこに、マルクスの人間観が一面でフォイエルバッハの自然的人間観を基礎としていることが、はっきり示されている。だから、マルクスは人間を自然的存在と社会的存在との統一としてとらえているのであって、マルクスの「類的存在」は、実はそのことを意味しているといえる。

それに対して、ヘスにあっては、人間は意識的な活動の主体としてだけとらえられ、そのため、人間の自然的側面は人間にとって非本質的なものと見なされているのであって、その点でヘスの人間観は、ドイツ古典哲学の理性的人間観の枠内にとどまっているといえる。

ヘスはスピノザの影響のもとに、人間を自然と精神との統一ととらえる。彼は、『人類の神聖史』では神を自然と精神との統一ととらえ、人間を「地上の精神として一種の神」と見なした。<sup>12)</sup> さらに、『ヨーロッパ三頭政治』では、「行為においては精神と自然とは一個同一のものであり、従って、「人間だけが救済者である」ともに被救済者である」という。<sup>13)</sup> このように、ヘスは人間の自然的側面を見落しているわけではないのだが、しかし、それは彼にとつては人間の本質に属さないものとしてであった。『貨幣について』において、彼はこういっている。「個々の人間は彼らの肉体的生活を交換する領域に対しては、……意識しない諸個体として、肉体として関係するが、彼らの社会的生活を交換する領域に対しては、意識をもち意識的に行爲する諸個体として関係する。」だから、「意識をもった人間にとつて

は、「理論的本質」としては「現実的意識」であり「実践的本質」としては「現実的生活活動」である「社会における交通」が、「現実的本質」なのである。

つまり、ヘスにあっては、意識的に行為するということにだけ人間の本質がみとめられて、人間が、意識的活動としての「交通」を行なう社会的存在としてだけとらえられ、他方で、人間の肉体的行為は無意識的行為と見なされて人間の本質とはみとめられず、従ってその意味で、自然的存在としての人間は非人間的なものにとらえられているのである。だから、ヘスは人間を社会的存在としてだけとらえているのであって、ヘスの「類的存在」はそれだけを意味しているといえる。この「ヘスとマルクスの「類的存在」における決定的な相異がある。マルクスはヘスと違って、人間を自然的存在としてもとらえるばかりでなく、人間の肉体的行為をも人間的なものとして見なしている<sup>(10)</sup>のである。

- (1) 高島、水田、平田『社会思想史概論』二〇三頁参照。
- (2) Marx—Engels—Schriften, S. 103. 三浦訳、一一七頁。
- (3) *ibid.*, S. 104. 同、一一九頁。
- (4) Marx—Engels—Gesamtausgabe. Abt. I. Bd. 3, S. 535—6. 杉原、重田訳『マルクス—経済学ノート』九六頁。
- (5) *ibid.*, S. 538. 同、一〇一頁。
- (6) *ibid.*, S. 538. 同、一〇一頁。
- (7) *ibid.*, S. 546—7. 同、一一七—一八頁。

(8) この論文の発表は一八四五年であるが、執筆は一八四四年である。(cf. A. Cornu: Marx und Engels, Bd. 1, Berl., 1954. S. 518, Anm. 205. なお、山中隆次『ヘスとマルクス』(上)「和歌山大学経済理論」第六二号、三六頁、註二、(下)同、第六三号、三五頁、註八参照。

なお、Geldwesen という用語は「いわば「貨幣」というもの」という意味であり、従って、論文名を本文でのように訳した。

- (9) Hegel—Schriften, S. 345.
- (10) *ibid.*, S. 330—1.
- (11) Marx—Engels—Die heilige Familie und andere philosophische Frühschriften. Berl., 1953. S. 85. 三浦訳、二四五—六頁。
- (12) Hegel: Die heilige Geschichte der Menschheit. Stuttgart, 1838. S. 187—9.
- (13) Hegel: Die europäische Triarchie. Lpz., 1841. S. 10.
- (14) Hegel—Schriften, S. 330—1.
- (15) マルクスはこう述べている。「食うとか、飲むとか、生むとかということはもちろんのこと、真正正銘の人間的な機能である。」<sup>(11)</sup>また、マルクスにとっては、「人間的である」ということは、ヘスのように、「意識的な活動である」ということと同じことではない。マルクスは続けて次のように述べている。「それにもかゝらず、これらを人間の活動の他の諸グループからきりはなして、かつたった一つの

最終的にまつりあげてしまふほど抽象化してしまつたとしたら、それらといえども動物的になる。」(Marx—Engels—Schriften, S. 102, 三浦訳、一一六頁<sup>2</sup>)

三

さて、マルクスとヘスとの人間観つまり「類的存在」という概念には、以上に見たような相異があるのであるが、両者の労働観における相異はそれと密接な関連をもっている。

マルクスにあっては、「類的存在」が自然的存在と社会的存在との統一を意味しているのに対応して、自然と労働とが「類的生活」の二契機としてとらえられている。彼によれば、人間の「類的生活」は、第一に、「人間が非有機的自然によって生活する」という点に、第二に、人間が「意識的活動」を行なうという点に存している。すなわち、自然の全体は、「理論的には」精神の対象として「人間の意識の一部をなしている。……それらは……精神的な生活手段である……。おなじくそれらは実践的にも生活と人間活動の一部をなしている。自然の……諸生産物……によってのみ人間は肉体的に生活をいとなんでいるのである。」<sup>3</sup>だから、人間は自然によって生活しているのであるが、しかし、生活手段としての自然はありのままの自然ではなく、生産物としての自然なのである。つまり、「自然の全体は、一面でそれが直接的な生活手段であるかぎり、また他面ではそれが彼(人間——引用者)の生活活動の素材であり、対象であり、道具であるかぎり、非有機的身体にされているのである。」<sup>4</sup>そ

して、マルクスにあっては、自然をこのような「非有機的身体」つまり生活手段にするのが、意識的活動としての労働なのである。なぜなら、「自由な意識的活動こそ人間という類の性格で」あり、「生産的生活は類的生活である」<sup>5</sup>のだから、「生産的生活そのものたる労働」は「自由な意識的活動」を意味しているのである。

このように、マルクスでは、人間の「類的生活」ととらえられた生産活動そのものたる労働が、(一)自然から人間の生活手段を作り出す、つまり自然と人間とを媒介するところの、(二)意識的活動ととらえられているのである。(マルクスは、労働が意識的活動であることから、人間は「普遍的に」、つまり「もろもろの種の基準にならって」あるいは「あらゆる点で対象に内属する基準を対象にあて」て生産することができると見なし、<sup>6</sup>「対象的世界の実践的産出、非有機的自然の改作」は、「人間が意識的な類的存在である」ということを確証する行為である」といっている。)

これに対して、ヘスは、人間をなによりもまず精神行為(Geistethat)をするものにとらえた。『行為の哲学』(Philosophie der That)において、彼はこういっている。「私の認識する最初の(そして最後の)ことは、まさに私の精神行為であり、私の認識である。」<sup>7</sup>だから、人間にとっては「存在ではなく行為が最初にして最後のものである。」<sup>8</sup>従って、彼にあっては精神行為が人間の木質と見なされているのであるが、しかし、彼はそれを純粹な精神行為としてではなく、精神が自己を

産出する精神行為が、そこで実現されるところの現実的活動たる生活活動としてとらえていた。彼は精神行為を、精神がそこで自己を産出する「生活の運動」と見なし、「生活は活動である。しかも活動は」精神の「自己産出 (Selbsterzeugung) である」といっている。そして彼にあっては、この生活活動は、精神行為として精神が主体ではあったが、人間のあらゆる生産活動を、従って根本的には労働を意味していた。彼は「精神が自己の反対物、他者、世界、生活を創造する」と見なし、労働を精神の「自己自身を形づくりかづこれをこえる働き」(das Ausarbeiten oder Herausarbeiten seiner selbst) とよんで<sup>(17)</sup>いる。

このように、ヘスは生産活動、労働を精神行為として、つまり意識的活動としてとらえているのであり、従って、この点ではヘスの労働把握はマルクスのそれと一致しているといえる。しかし、マルクスにあっては主体が意識をもった自然的人間として現実の人間であったのに対して、ヘスでは主体が精神であったため、マルクスにおいてはつきりとりえられていた労働における自然と人間との関係、つまり自然と人間との媒介という労働の役割が全くとらえられていない。そればかりか、マルクスでは労働そのものが「類的生活」と見なされていたのに対して、ヘスでは、前にも述べたように、労働そのものというより労働の交換が「類的行為」と見なされていた。だから、ヘスにあっては、労働の交換を意識的活動ととらえているところでは、「類的行為」を意識的活動ととらえるという点でマルクスと

一致しているといえるが、しかし、マルクスの「類的生活」とヘスの「類的行為」とでは内容が同一ではなかった。

ところで、マルクスはまた、ヘーゲルの労働観から継承したものであるが、労働を人間の「自己産出行為ないし自己対象化行為」(Selbsterzeugungs-order Selbstvergegenständlichungssakt)としてとらえていた。彼によれば、労働とは「人間が自分の類の諸力のすべてを……外部にうみおとし」、自己自身を対象化する行為として「自己対象化行為」なのであるが、この対象化はさしあたり「対象の離反 (Entgegenstandlichung) とし」、つまり外在化として「現われる。この意味で、

「労働とは、外在化のわくのなかで、ないし外在化された人間として、人間が対自的になることである」のだが、この「外在化の揚棄」を通して人間は自己自身を産出するのである。つまり、人間は「自己自身の労働の成果」なのであり、従って労働は「人間の自己産出行為」なのである。<sup>(18)</sup>

このようなマルクスの把握に対して、ヘスにあっては精神が主体であったため、労働は精神の「自己他者化」(Sichanderswerden) 活動あるいは「自己産出」活動としてとらえられていた。彼によれば、「生活の運動」あるいは生活活動たる労働において、精神は「自ら他者として自己と区別されるが、しかしこの自己他者化あるいは自己区別において自己同一を認識する」のであり、従って労働は「精神の対立物の措定と止揚とによる同一性の回復であり、……精神の同一物 (Gleichen)、精神の自己同一の産出」であって、要するに、精神の「自己産出」



なのである。<sup>(12)</sup>

つまり、ヘスにあっては、労働は、精神が自己を他者、自己の対立物として措定する活動たる精神の「自己他者化」活動としてとらえられており、そして、この「自己他者化」とは「自己対象化」のことなのであるから、彼は労働を精神の「自己対象化行為」ととらえているといえる。さらに、彼は、精神は労働において措定した自己の対立物、自己他者化を止揚することによって自己を産出するととらえており、その意味で労働を精神の「自己自身を形づくりにかつこれをこえる働き」と見なしているのであるから、彼は、労働を精神の「自己産出行為」ととらえているといえる。だから、主体の相異を度外視すれば、この点でのヘスの労働把握はマルクスのそれと一致しているといえることができる。

この一致が、両者の方法における共通性の基礎となっているのであるが、しかし、両者における人間観における相異を基礎とする労働の主体の相異は、たんに主体の相異であるばかりでなく、さらに方法の相異、対象化や疎外の把握における相異をも生ぜしめることになるのである。<sup>(13)</sup>

(1) Marx—Engels—Schriften, S. 103 u. 104. 三浦訳、一一七および一一九頁。

(2) *ibid.*, S. 103. 同、一一七—八頁。

(3) *ibid.*, S. 103. 同、一一八頁。

(4) *ibid.*, S. 104. 同、一一九頁。

(5) *ibid.*, S. 104. 同、一一九頁。

(6) *ibid.*, S. 105. 同、一二〇頁。

(7) *ibid.*, S. 104. 同、一一九頁。

(8) Hegel—Schriften, S. 210.

(9) *ibid.*, S. 211.

(10) *ibid.*, S. 224—5.

(11) 大野精三郎『Hegel—Marxの労働把握とその射程』「経済研究」第九巻、第三号、二六七—八頁参照。

(12) Marx—Engels—Frühschriften, S. 92 u. 93. 三浦

訳、二五六および二五八頁。

(13) *ibid.*, S. 80—1. 同、二三九—四〇頁。

(14) Hegel—Schriften, S. 211.

(15) ヘスとマルクスにおけるこの人間観および労働観と方法との関連については、他日稿を改めて考察することにし

たい。

(一橋大学大学院学生)